

No. 1, pp. 1 - 4

1. VI. 1965

寄せ蛾記

埼玉蛾類談話会 発行(連絡会報)

YOSEGAKI ; THE SAITAMA HETEROCHERISTS' GROUP

会の成りたちについて

市川和夫

この会は、埼玉県南部に居住している日本蛾類学会の会員が、談話会に出席した帰路に話し合つて成立したものである。

そして、学会の談話会が開かれない月に、主として県内の同好者が小グループの会合をもち初め、1963年の6月から本年4月までの間に10回の集まりを行ってきてている。この間には、不行きとどきな点が多く恐縮しているが、学会の第44回蛾類談話会(1964年3月29日)を、初めて浦和で実施するなどのこともあつたし、また、杉繁郎・中村正直の両氏に来て頂いて、主としてヤガ科とシヤチホコガ科の同定や、その他の教示を願つたりしてきた。

ふだん会合の際には、採集標本の供覧・採集経験の発表や意見等の交換・参考図書や文献の相互利用などをを行い、会員も会則も、そして入会規定もないままに、ただ蛾の好きな人達が毎回10名近く集まり、よそぞこのままでニ益々熱心な者ばかりし、会の内容も充実してくるものと予想されますが、それ同時に「しかし卅二人ほ」とからだいさう自重しなければいけないとお詫びがって

いる。

さて、最近になって、連絡会報を発行しようという話や、会の運営を円滑に行うための通信事務、会会費等の關係から、必要最小限の次の事項が、第9回と10回目の会合の際に決定している。

1. 会名 埼玉蛾類談話会
2. 談話会 原則として隔月に1回(日本蛾類学会の例会がない月)。
会場は、
3. 会費 談話会に出席する毎に50円、
これは、茶葉・通信費などに充当し、
残りは会の資金とする。
4. 連絡・事務等担当者 田村公憲
5. 会報担当者 市川和夫

私としては、この小さなグループが将来は日本蛾類学会の埼玉県支部という形に発展できればよいと期待し、会員ともども励んでいきたいと考えております。それにつけても、学会や他の研究会・同好会などの諸先輩の助言や鞭撻指導を賜りたく、会の紹介と併せてお願いします。

北アルプスにおける アセチレン燈点火の記〔1〕

原 聖樹

高山での夜間採集は、いろいろな点で骨の折れるものである。小屋泊りならばどもかく、4～5日分の幕営具や食料はもちろん、採集用具その他を携えてのことである。また同行者があつても、いつもの例からいふと、結果的にはその荷物の大半が筆者の肩にくい込むことになってしまふ。そうして、たいていはスケジュールに時間的な余裕が乏しく、先を急ぐ山旅となり勝ちなので、山行の目的を夜間採集一つにしほることは難しく、昼間の採集もゆめやれおろそかにできない。

余談はさておき、初陣は1963年の8月20～21の両日、広居忠重氏と共に、白馬岳頂上ホテル付近（標高約2,800M.）の幕営地で採集を行つた。

8月20日

午後7時ごろにアセチレン燈を点火してみたが、空には星が散見されるし風もかなり強く、採集には不適当な天候であったが、構わずに午後11時近くまでねばってみた。

この間に飛来したものは、4頭のアルプスキンウワバと、数頭のサザナミナミシヤクだけで、およそ30分～60分に1匹飛来するといった状態であった。そこで、退屈しのぎにホテルの外燈を見てまわってみると、何頭か来ているし、室内の燈火を目当てに飛来したものは、窓枠の外に静止している。

前に談話会の時に持つていった採集品の大部分は、実はこの外燈と窓枠のところで採集したものにほかならない。

8月21日

ガスが湧いて採集には絶好の条件となつたが、それものは前日のものと大差ない。それに少し登って白馬山荘まで出掛けたが、ここには螢光燈がついているに拘らず、一巡したところではどうしたわけか、蛾の姿は全く見られなかつた。

また、この日には、昼間に尾根筋でサザナミナミシヤクの飛翔を少なからず認めたことを付記しておく。

なお、前記2種のほかの当時の採集品は、目下当会の諸氏が調べているので、後で発表されると想う。この採集の際に使用した用具は、田村、高木、松本の諸氏から借用したもので、厚くお礼申し上げる。

1965年中の月令計算法

※10回の談話会の席上、矢野重明氏から夜間採集に適当な月令の計算式を教つた。本年中は次のとおりである。

$$(月の数字) + (日の数字) + 24 = \text{その日の月令}$$

(ただし、和が30を超えるときは、)
(さらに30を引くこと)

例： 6月13日は、 $6 + 13 + 24 = 43$, $43 - 30 = 13$ 。で月令13日、満月に近く採集には不適当といえる。

(埼玉県産蛾類分布資料 1)

コウチスズメの採集記録

並木 椎雄

県内で、コウチスズメ *Smerinthus tokyonis* MATSUMURA を採集したのでここに報告する。標本は筆者が保監している。

1 ex. 三峰山, 10. V. 1964

1 ex. 三峰山; 5. VII. 1964

三峰山(秩父郡大滝村三峰、約1,000m)

ヒサゴスズメの採集記録

市川 和夫

ヒサゴスズメ *Mimas tiliae christophi* STAUDINGER
を県内の低山で採集できたのでここに報告する。標本は筆者が保監している。

1 ♀ 宝登山, 27. VIII. 1963
宝登山(秩父郡野上町、約490m)

※10回談話会 4月18日(日)の午後1時から5時まで開催。高木郁夫氏が長野県新野高原の様子と採集した蛾の標本を供覧、また並木椎雄氏が4月4日に高尾山で採集した蛾数種と、昨年三峰で採集した2頭のコウチスズメを持参した。また、田村公憲・高木郁夫の両氏が他の会員の協力を得て調べた「清澄山の蛾類」を、最近の内にまとめて印刷することを皆で喜び、最後に、矢野重明氏の司会で、この会の名を「埼玉蛾類談話会」また、連絡会報を「寄せ蛾記」とすることなどを決定して散会した。なお、本年中の月令計算法についても前頁のように定数は24であることを教った。

出席者 8名: 並木椎雄、田村公憲、鳥鴻顯雄、矢野重明、高木郁夫、松沢宣泰、原聖樹、市川和夫。

次回は、6月13日(日) 午後1時からの予定。

幼虫飼育ノート

マダラツマキリヨトウ の 幼虫

市川 和夫

マダラツマキリヨトウ *Callopistria repleta* WALKER の幼虫と、その食草は、よくわかつていないうらしい。ただ、¹⁾杉繁郎(1959)は、この属のものはすべてシダ類を食草とするものと思うと述べている。さらに、キスジツマキリヨトウの食草として、シノブ・イヌシダ・クサソテツなどのシダ類を挙げている。

¹⁾ 原色昆虫大図鑑 I, p.29

1964年9月25日に、浦和市上木崎の林下にはえるカナワラビを食べて成熟した4匹の幼虫を、並木良作氏が食草ごと持ってきてくれたが、それを調べてみると、²⁾河田黨(1959)のキスジツマキリヨトウの記載および写真のものと良く似ていた。しかし、気門腺の色が違うので、一応飼育をして羽化を待つことにし、1匹は固定して表紙標本と

²⁾ 日本幼虫図鑑, p. 287

して、他はシャーレに砂を入れて育てみた。その後本年5月に羽化したので早速調べてみたら、いずれもマダラツマキリヨトウであった。

1. 幼虫について

本種の幼虫は、概形・大きさ・斑紋などが、キスジツマキリヨトウの幼虫とよく似ているが、気門線の色が鮮やかな赤紫色（キスジでは黒褐色という）なので区別できる。

2. 幼虫の食草

野外ではカナフラビの例より知らないうが、イヌフラビ・ジュウモンジシダ・ゼンマイでも飼育できる。

3. サナギについて

成熟幼虫は地中でやや扁平な長だ円球状のマユを作り、その中で蛹化する。マユの長径約18mm、短径10~12mmあって、成虫はその一端に穴を開けて出てくる。